
懐思季 - なしき -

松本かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

懐思季 - なしき -

【Nコード】

N6086I

【作者名】

松本かなた

【あらすじ】

何だかわけの分からない前置きから始まる無理やり感が否めないお話。

暗いストーリーです。ご注意あれ。

蓮の幼馴染である梓は帰り道に連から衝撃的なことを打ち明けられる。

そこから繰り広げられる急展開なストーリーとドロドロとした世界観：果たしてラストを飾るのはいったいなんなのか。

（前書き）

あんなのもうあらずじやない。

目の前に広がったのは今まで見たことの無い光景で、一生のうちに経験するかどうかも分からないようなことだった。

私の目の前にいるのはよく知っている人だけど、名前くらいしか思い出せない。

彼は散らかった赤い液体を指に取ると、それを口に含んだ。

「梓、帰ろうぜ。」

帰りのHRが終わり、一息ついた。

私はいつも幼馴染と一緒に帰ってるのだが、それと私ではペースがまるきり違う。

波に乗って帰ってもいいが、人がうじゃうじゃといて邪魔でしょうがない。それなら少しくらいゆっくりした方が懸命だと考える。

でも、彼はさっさと帰りたらしく、いつも私を急がせる。別に嫌なわけじゃない。

ただ、私はあくまでマイペースにしている。それだけだ。

今時の高校生というのは自転車通学者の人口が多く、まるきり徒歩というのは少ない。私達は例外だが、例外だからこそ自転車が無数に走っているのはうっとおしい。そのことは同意してくれている。教室から沢山の人が出て行き、たった 5分ほどでもう残っているのは私を含み4・5人程度。そうなったことを確認して私は席を立った。

外に出て青々としたいちよう並木を歩いて行く。涼しげな風にあたり、学校の窮屈な空気が嘘のように思えた。そんな中を男女が歩いている。嗚呼、なんて微笑ましいのだろう。これが彼氏か何かだったのなら私もそう思える。

「この後カラオケ行くんだっけ？」

中学の頃の友達とそんな約束をしていた気がして蓮に訊ねる。ああ、そうそう。私の幼馴染は”蓮”という。

「ああ。いつもの駅のところだ。迎えに言つてやるから、一緒に行こうぜ。」

迎えに行くといつてもそんな大層なものではなくて、すぐ隣である。駅にはあまり近い方ではないのでいつもなら重い荷物を持ったまま行くことのほうが多いのだが、今回はそんなに急いでないので一度家に帰る。夜遅くから行くのではなく、今日は午前授業だからだ。

「そういえば、お前今日は家に誰も居ないんだろう？うち来て昼飯食おうぜ。美琴も会いたがつてるし。」

「んー美琴ちゃんがそう言ってるなら、お邪魔しようかな。」

素直じゃねえな、などと言われつつ私は自分の家より1軒奥の上村家へやってきた。

物静かな住宅地にあるため、近くに住んでいる同級生は蓮くらいだし、だいたい同じ年くらいの学生もここにはいない。

美琴ちゃんはまだ中学生だが、私立中学校へ通っているため寮で暮らしている。今日のようにちよくちよく帰ってくるのだが、私は自分から外へ出かけたりはしないので、会うことはあまりない。

「ただいまー。」

「お邪魔します。」

両親が共働きの私はよく上村家の方々にお世話になっている。たまに喧嘩が始まることもあるが、全てが微笑ましく見えた。…なんというか、自分が孫を見つめるお祖母ちゃんのようなのだ。

来慣れた他人の家の見慣れた廊下を歩いていく。

「お帰り、お兄ちゃ…梓さん！！お久しぶりです。」

明らかにテンションの変化が急なところが懐かしい。約一年ぶりだろうか。

「久しぶり。元気だった？」

決まり文句を口にするると私は近くのソファに腰かける。

「ひでーなー。お兄ちゃんにはそのhighなテンションの挨拶はねーのかよ。」

「ノーマルな人間に興味は無いの。」

私が普通じゃないみたいと言いだけれど、別に嫌とは思わなかった。慣れというのは怖いものだ。

「今からご飯作るので待っていてくださいね。」

あきらかに兄を避けるようにして私に言っと、そのままキッチンの方へ行った。蓮はふてくされたような顔でテレビをつける。

つけた番組では、ニュースをやっていて朝に見ても昼に見ても変わりなかった。

変わっているとしたら二　ユースのキャスターくらいで、人が殺されただの、家が荒らされただの、そういうのばかりだ。その手のネタの方が受けはいいのかもしれないが、私としてはもう少しソフトなものが欲しい。最近では特集を組んでもそんなのばかりだ。日本の犯罪が減らない理由の1つでもあると思う。

「いいよなーお前は。妹に懐かれて。」

フテクサ蓮と化したお兄さんがシスコンめいたことを言った。私だって毎日顔を合わせていれば自然とそういう態度をとられるようになると思う。人っていうのは血縁者に対して冷たい部分もあるし。

「どうせ俺は嫌われ者だからな…はいはい。邪魔者ですよ。」

こんなことも最近こそ無かったが、なれているとスルーできるものだ。

「出来ましたよ！美琴特製カレーです。」

「あ、それ昨日の余りものな。」

妹に殴られている兄を見ながら私は笑った。仲の良いこと、美しきかな。

「カレーは煮込むほど美味しくなるっていうから。」

私がそんなことを言っと、だから梓さん好きなんです、なんてことを返されて少したじたじとしてしまったが、3人で目の前にあるものを食べ始める。

彼女は料理が上手いので美味しく食べれる。こういうところは見習いたい。

少々のお話を楽しみながらの食事は終わりを告げた。

早々だが、私と蓮は例のカラオケ屋に行かなくてはいけないため、上村家を後にする。

見るからに私びいきな手の振り方の少女に見送られながら私と蓮は目的地へ向かった。

さつきと同じ景色の道を歩いていく。単発的な会話をいくつか繰り返し、3・40分程歩くと、目的地に着いた。私たちを待ち構えていたのは3人の元クラスメイト達で、私達は最後の到着だったらしい。

「おつ。懐かしのご夫婦は揃って登場ですね。」

幼馴染と言っただけあって、蓮とは昔からよく遊んでいた。そのため、中学の時はこんな風に呼ばれることもあった。もちろん冗談でいつているのだろうか、私も蓮もあまり気にしていない。

「その呼び方も久しぶりに聞いたな。」

さあ、そろそろ入ろう。と付け足し、入店した。

内容は実に濃ゆいものだったので省略する。

中学の頃の友達と会うのは久しぶりだったため、とても楽しめた。飲み放題恒例のあれこれ混ぜ放題でも色々とサプライズがあって何だか新鮮だった。

帰りは3人とは逆方向のため道筋もメンバーも来た通りに帰る。

変化があったのは…蓮のまわっている空気だった。

楽しかったなーとか、わいわいと話をしている間はいつもの蓮だった。しかし話が一瞬途絶えた時、今の蓮に変わった。

未成年にしてみれば少し遅い時間。夜というのは人を悲観的にさせる。何かあったのかどうかは知らないが、できることなら解決しあげたい。

「なあ、お前1人になりたいときってあるか？」

唐突な質問だった。勿論ある。私には兄弟がいから寧ろ1人の方が気楽でいられると思うくらいだ。…蓮は1人になりたいのだろうか。

「私、道変えようか？1人になりたいなら無理して一緒にいなくてもいいよ？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。寧ろ1人にしたら心配だ。ただの質問だよ。」

不安は人に伝染する。何だか私も空気に飲み込まれそうだ。

ネガティブな思想は私の得意分野だけれど、今回ばかりはそうであってはいけない。

「…私は1人っ子だし、兄妹がいる人の感覚じゃないけど、やっぱり1人でいたいと思うときはあるよ。」

他人という時間が少ない私でも、という意味で。

蓮は そうか と言うと、さつきと変わらずにいる。ただ進む方向を虚ろに見つめて、危なげな空気をまとい、歩いてゆく。いつも相談に乗ってもらう側の私にはこういう時にどうしたらいいのか分からない。

「うち、まだ誰も帰ってきてないと思うけど…相談のろうか？」

この際、男女がどうのって話は無視しておく。今の私にはこんなことしか浮かばないから。

「うち、異質なんだよ。」

予想の通りに誰も居なかったうちの家。蓮にあがってもらい、リビングでお茶を飲みながら話し始める。

「うちの家は代々女の子しか認めないんだ。今まで男の子ができた時は降ろしてたらしい。でも、うちの両親はそれを隠していたんだ。せつかく授かった命をつて。」

2人しかいない部屋にいつもより少しトーンの低い蓮の声が響く。決して楽しいではない。それはどこか遠くを見据えた声。

「最初のうちは隠しきれていたらしいんだがな、大きくなれば当

然そんなこともできなくなる。そこで両親は本家を出て上村家で唯一の分家になったんだ。わざわざ職場を遠くにして半ば強引に出てきたらしい。」

そんな大切なことを私に話していいのだろうか。私が誰にも話さないという根拠は無い。嬉しいことでもあるが、複雑でもある。

「今ではもう知られているから、1人で歩いていたりすると狙われたりするんだ。家にいる時は何もされないからいいんだけどな。」

「いいって…命を狙われてるって事でしょ？なのになんで…」

私に構って話しかけたり、夜道を心配してくれたり…自分の事はどうなの？

さえぎられた言葉の後に紡がれたのは死の宣告だった。

「だから…」

私の左肩を強く押し、私の上に覆いかぶさる。私の右手と彼の左手は繋がり、何秒間か互いの唇が重なり合った。抗えない。ただ体中の力が抜けていく。

否、抗う必要がないのかもしれない。私自身、蓮が好きだったから。

このときはただ落ち着くことだけ考えていた。今起きていることが分からない。何故私はこんな状態なのか。…」だから」に続く言葉は何なのか。

唇を離し、しばらく3？くらいの距離のまま時が止まった。

連の顔が耳元にくると、囁く。

「俺と一緒に死んでくれ。」

/ 暗転

目の前に広がったのは今まで見たことのない光景で、一生のうちに経験するかどうかも分からないような事だった。

私の目の前に居るのは良く知っている人だけど、名前くらいしか思い出せない。

彼は散らかった赤い液体を指にとるとそれを口に含んだ。

痛みはあった。でもその後の光景がショックすぎてそんなこと感じられなかった。

ごめんと一言小さく言って、蓮は私の目の前で死んでいった。勿論今はもう私も生きてはいない。

遠のいていく意識の中で私が最後に見たのは悲しげな蓮の笑顔だった。

（後書き）

色々とすいませんでした。

若気の至りとも思って生暖かい目でスルーしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6086i/>

懷思季 - なしき -

2010年12月9日21時33分発行